



## 第89回 雨にぬれても -気候変動と日常-

### ▼雨つづきの夏

8月中旬は長雨が続き、9月に入ると急に秋めいてきた。7～8月の雨は、熱海の土砂災害を筆頭に、鳥取県内でも境港の浸水などの被害を引き起こした。実家のある鳥取市南部も心配だったが、幸い深刻な被害はなかったようだ。ただ、豪雨により裏山からの水が集中し、裏庭は水浸しで、あふれた水は川となって隣家へ注ぎ込んでいた。水路が足りないことが悔やまれたが、短い期間に大雨が降れば、排水限界を超えるのは当たり前だと気がついた。

### ▼地球史からみた温暖化

最近の線状降水帯に伴う集中豪雨は温暖化の一環ではないかといわれている。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)の最新報告書によると、このままのペースでCO<sub>2</sub>排出が続けば地球の平均気温は数十年後に2度近く上昇する。気温上昇は極地の氷をとかし、海面の上昇、大雨と洪水、巨大台風につながる。

巨視的にみると、地球史のなかで今は新生代第4氷河期の間氷期(かんぴょうき:氷期の間にはさまれた温暖な時代)にあたる。20世紀初頭、セルビアの地球物理学者ミルティン・ミランコビッチは、地球の気候変動が太陽の輻射熱の増減に由来していると考えた。輻射熱は地球の公転軌道の離心率(円～楕円)、地軸の傾き、地軸のゆらぎ運動に関連し、これらの周期によって気候変動を説明できると考えた。この理論は南極やグリーンランドの地下氷の分析から、おおそ正しいと考えられている。地球は約10万年周期で長い氷期と短い間氷期(かんぴょうき)を繰り返し、いまは間氷期のピークから氷期へ向かっているはずだ。現生人類ホモ・サピエンスが生まれたのは約10-20万年前、ここ数千年で人類は急速に文明を発達させ、産業革命を経て石炭石油などの地下資源を利用するようになった。人類は地球史上はじめて、自然から逸脱したベクトル(石炭石油によるCO<sub>2</sub>排出)を環境に挿入した。その結果、地球はミランコビッチ理論の予想とは異なり、急激な温暖化の方向へ向かっている。

### ▼文明の脆弱さ

恐竜のいた中生代ジュラ期(約2億年前～1億4,500万年前)から現在までの時間軸を直線で書いてみると、人類の興隆など、虫眼鏡でようやく見える程度でしかない。恐竜は人類よりはるかに長い間、繁栄していた。そして地球は想像以上の気候変動を何度も経験している。そう考えると人類の築いた文明とはなんと脆弱なものだろうか、わずかな温暖化で致命的になりかねないのだ。では、そろそろ身近な時間に戻るとしよう。実家の裏庭に溢れた水をどうするか、水路を掘るか土嚢を積むか。目の前のことしか考えられない自分は、何だか少し情けないのであった。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにぐち しんいち)